

高度急性期看護学実習における救急外来・集中治療室（ICU）実習を体験した学生の学び

小川真貴¹⁾、今井雄二¹⁾、貝瀬友子¹⁾

1) 新潟医療福祉大学 看護学部 看護学科

【背景・目的】 本学では4年次に高度急性期実習において、救急外来とICUの見学実習を行っている。実習目的は、クリティカルな状況にある患者の身体・心理的特徴および家族の理解、患者・家族を支える看護および多職種連携について理解を深めることである。

救急外来・ICUは、救命と同時に生命喪失のリスクを孕んだ現場でもある。生命維持活動が最優先される緊迫した現場において、学生は、どのような場面から何を学んでいるのか。そこでの学びを明らかにすることは、救急看護のみならず、急性期から慢性期、在宅療養、終末期へと続く医療の始まりであり、卒業時の到達目標を踏まえた授業構成や演習、実習など教育内容検討の一助となると考える。

【方法】 対象者は、2019年6月17日～8月2日まで、高度急性期看護学実習を受講した4年次生である。

研究協力の依頼は、各実習グループの実習初日に研究の趣旨を説明し、研究者へ申し出、無記名自記式アンケートへの入力をもって同意が得られたものとした。

分析方法は、アンケート内容を精読し意味内容を損なわない程度に要約しサブカテゴリー、カテゴリーに集約した。

なお、本研究は新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を受けて実施された。関連する利益相反はない。

【結果】 76名から回答を得た。（回収率90%、有効回答率100%）分析した結果、6カテゴリー、15サブカテゴリーが抽出された。カテゴリーを『』、サブカテゴリーを〈〉で示す。

『看護師の判断能力』では、〈予測判断〉、〈観察力〉、〈アセスメント〉、〈迅速な判断〉に分類された。看護師の観察は、モニターによる継続観察と異常の早期発見の重要性に加え、声かけや触るなど看護師の五感を用いた細部の変化も見逃さない観察力とリスクを予測した迅速な判断力が、緊急事態に対応する重要な要素として上げられていた。

『人工呼吸器患者』では、〈観察〉、〈コミュニケーション〉に分類された。人工呼吸器装着中の患者は機器装着中の安全性の確保と同時に、話すことができない患者に対し、声掛けやタッチングを行って意識レベルの確認を行うと同時にコミュニケーションの重要性が上げられていた。

『重症患者の対応』では、〈タッチング〉、〈傾聴〉、〈声掛け〉、〈鎮静〉に分類された。意識のない患者や鎮静状態にある患者、不安や混乱状態にある患者に対しては、タッチングや声掛け、患者の思いを傾聴するなどが上げられた。そうした患者の家族に対しては、患者の傍に誘導し、声掛けや手を握るなどを促したり、家族がいない間や現在の状

況、今後の治療の見通しを説明するなど、不安軽減に努めている状況が上げられていた。

『重症患者の管理』では、〈医療機器〉、〈安全の確保〉に分類された。多くの医療機器類を使用する患者の安全管理、複数のルート類、薬剤の使用は医療事故を発生させる要因ともなる。そのため、ルート類の整理や薬剤の正確な投与とともに薬剤の効果を確認し、観察・報告するなど、疾患・病状に合わせた個別的なケアの重要性が上げられていた。

『受け入れ態勢』では、〈受け入れ〉、〈連携〉、〈ドクターヘリ〉に分類された。受け入れ体制では、救急隊員や医師からの情報を基に、速やかに診察、検査ができるように準備を行い、他部門との連絡やICU待機ベッドの確保など、また、ドクターヘリでは他病院の医師や看護師からの申し送りを受けるなどの連携により、地域の救命に果たす役割の大きさを実感するなど、地域医療を守る最前線の意義を上げ、また、地域のイベント情報など事前に救急搬入体制を整え、災害に備えた準備体制などを学んでいた。

『看護観』では、多くの知識が必要なやりがいのある仕事であり、また、知識や技術だけでなく患者や家族の痛みや不安をも理解しケアを行っていたことが上げられていた。

【考察】 学生にとって救急外来、ICUでの学びは、今後の臨床での看護師活動にとって大きな意味を持つといえる。

学びの特徴として、モニター管理による患者の異常の早期発見や医療機器の管理など、現時点では十分な知識はなく自分では不可能であるが、それらの重要性を認識すると同時に、バイタルサインや看護師の知識や感性を駆使した観察の重要性、意識が明瞭でない患者に対する説明や声掛け、タッチングなど、患者を尊重した看護師の丁寧な態度に対する記述が多くみられた。同様に、突発的で深刻な患者に戸惑う家族に対しても、不慣れな環境の中で患者への理解と安心を促す場面を見て、ケアの重要性を学んでいた。

救急外来やICU患者の受け入れ体制では、広域な地域を抱える新潟の地域医療を支えるドクターヘリや救急隊との連携、情報交換により、早期に的確な診療体制を整えて救命率を上げるなど、見学内容を実感を持って学んでいた。

看護観については、救急状態の患者・家族の看護を通して、今までの実習経験を振り返るきっかけとなり、改めて知識や技術を学ぶ動機付けとなっている。石渡（2018）は、「ICU・HCU実習を経て、自己の看護を振り返り、自己の体験を肯定できたことが看護観の形成には重要である」と述べているが、本研究でも同様の結果となっていた。

【結論】 高度急性期実習で学生は、生命に直結する観察と迅速な判断力、患者や家族に寄り添う看護の役割の重要性を学び、自分の実習経験を振り返り、学びの動機付けとして学生個々の看護観に影響を与えている。そのため、タイムリーなフィードバック体制を整えていく必要がある。